

確かな観察眼 本質追求

歴史、風景、花鳥、人物、宗教画など多彩な画材を描き、日本画壇に大きな功績を残した堅山南風（1887～1980年）の70年に及ぶ画業をたどる「堅山南風展」が17～27日、熊本市中央区の鶴屋百貨店東館7階鶴屋ホールで開かれる。創立80周年を迎えた熊本日新聞社と70周年を迎えた鶴屋の主催。入場無料。開催を前に作品の魅力などを紹介する。

南風先生は日本の近代化が進む明治期の真つただ中に生まれ育った。文化的には国内に独自の公募団体が生まれ、日本画をいかに発展させるかを模索していた激動の時代だった。

風景、花鳥、人物など、さまざまな題材を描いておられるが、どの作品にも「おらかさ」が一貫してある。これが簡単にできるものではない。そこに至るまでの経験や研さんは並大抵ではなかっただろう。

『瑞龍』など、独特な墨色を基調とした作品も多い。墨は書き直しがきくものではなく、筆致もダイレ

日本画家・中村賢次さん（崇城大芸術学部教授）

クトに出る。南風先生の場合、筆の動かし方がとてもおらかで大胆だと思う。師の横山大観（1868～1958）は真つ黒でシャープな墨色を好んだ。南風先生の墨も同じくらい真つ



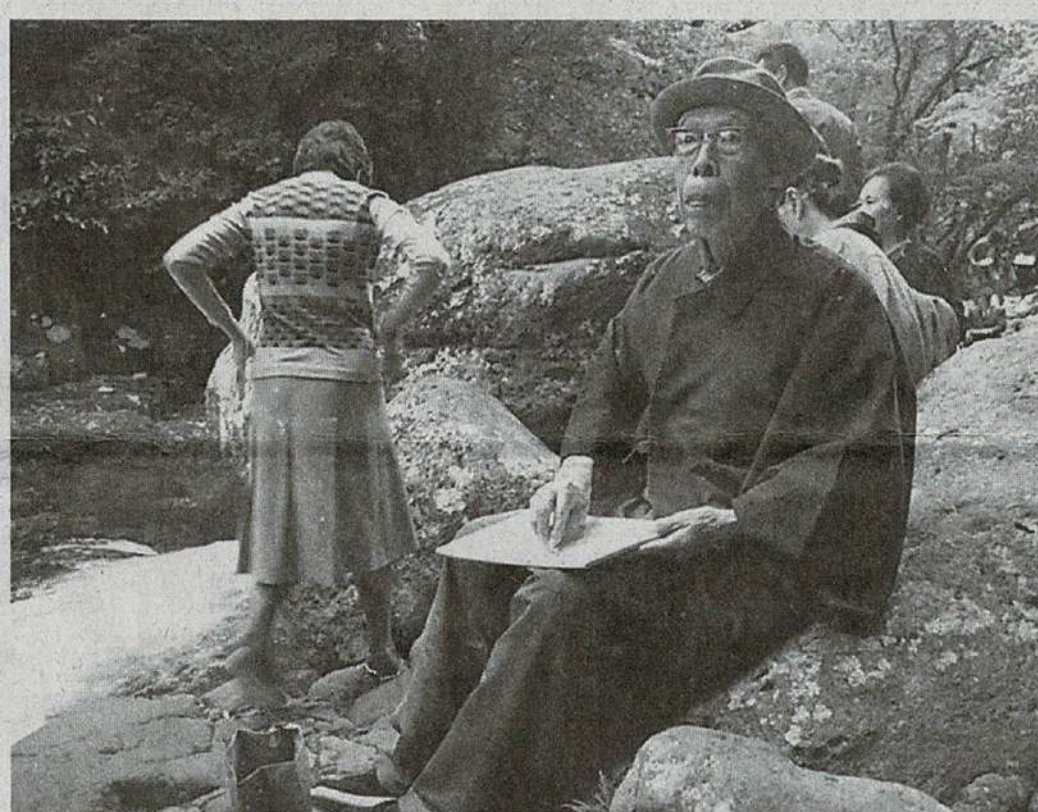
黒だが、どこか柔らかい。この墨色が絵に入ることによって全体的にふっくらとした印象を受け、不思議と引きつけられる。師と性質が対照的なのも興味深い。

墨を最初にのせ、上から岩絵の具を塗って柔らかさをを出している絵もある。南風先生の絵における黒は主役ではないものの、ベースとして全ての色をつなぎ、ほかの色を引き立てる役割として常に存在している。

いわゆる技巧派がひしめく近代日本画家の中で、南風先生は決して技術を押し出すタイプではなかった。対象が持つ「唯一無二のもの」を描き出すことが制作の中心にあったのだろう。作品の中で特に圧倒されるのが肖像画。武者小路実篤や中村汀女などを描いているが、そっくりなだけで

はなく、その人の性格や雰囲気も含めて描き出している。「似ている」というのは、あくまで姿形だけの話。南風先生はそれだけにとどまらず、人柄を写し取る力量が飛び抜けている。

両親を早くに亡くし、祖父の観察力が養われたのだろう。日本画は外に出て写生するのが基本中の基本。南風先生はタヒチやインドにも足を運んでおり、写生に重点を置いている。晩年に菊池溪谷でスケッチしたエピソードからも分かるように、完全な現場主義。本物、実物に向かい合うことを一番に考えていたのだろう。モチーフの幅の広さはそこからきている。コイも日があつて写生しないと、あのようには描けない。単純な形の写し取りではなく、どういう生き物なのか特徴を見極める観察に相当な時間をかけている。



菊池溪谷でスケッチをする堅山南風＝1975年10月

日本文化の中で、ものづくりに携わる人間にとつて、南風先生の本質を描きとろうとする姿勢は大切な方向性を示してくださっているように思う。（談）